

映画をめぐる国策の状況をリアルに伝える基礎資料

# 『日本映画』 『映画旬報』

全51巻  
全巻完結

★資料・〈戦時下〉のメディア 第I期：統制下の映画雑誌

◆監修・解説 牧野 守 (映画史研究家)



ゆまに  
書房 YUMANI  
SHOBU

# 国家総動員体制における映画雑誌の変遷をたどる貴重な資料

映画は、近代社会のマスメディアであった。特に国家総動員体制で戦時下に果たした役割は大きい。本集成は、映画研究はもとより、戦時下のメディア研究、植民地研究など、第二次世界大戦をめぐる諸研究の基本資料である。

一九四一（昭和十六）年、内務省の指示により当時十三社あった民間映画雑誌出版社は二社に統合された。同時に既存の映画雑誌をすべて廃止して新たに十三誌を創刊して映画臨戦態勢が固まった。その後さらに三誌に絞られ、四十四（昭和十九）年には、ついに『日本映画』一誌のみとなってしまふ。

## <本書の特色>

- 「資料・（戦時下のメディア）」は、戦争とメディアの絡まり合いの中で近代日本を検証する資料を集成するものです。
- 第一期「統制下の映画雑誌」は、映画が内務省の統制のもとにあった戦時下の映画雑誌、『日本映画』および『映画旬報』を復刻集成。
- 「日本映画」は、菊池寛を中心に文芸春秋社が編集し、映画の検閲手続き機関であった大日本映画協会が発行した理論誌で、国策の影響が直接的に現れている重要な文献です。
- 雑誌「キネマ旬報」の戦時下における継続誌で、民衆の動向をよく反映しています。
- 配本ごとに、各収録年代を反映させた解説および資料を付しました。
- 旧植民地および従属地域の住民の嗜好調査や、満州映画社や朝鮮映画社の動向も満載。
- プロパガンダ、公共的記憶の構築、メディアアリティ、植民地文化などの研究に欠くことのない情報群。
- 映画史をはじめ、歴史学、思想史、メディア史、文化史、社会学などの研究にも必須の資料です。

年次	刊行回数	巻数	冊数	発行所	編集者	発行地
昭和十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和二十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和二十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和二十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和二十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和二十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和二十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和二十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和二十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和二十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和二十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和三十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和三十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和三十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和三十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和三十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和三十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和三十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和三十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和三十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和三十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和四十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和四十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和四十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和四十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和四十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和四十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和四十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和四十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和四十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和四十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和五十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和五十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和五十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和五十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和五十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和五十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和五十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和五十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和五十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和五十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和六十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和六十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和六十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和六十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和六十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和六十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和六十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和六十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和六十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和六十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和七十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和七十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和七十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和七十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和七十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和七十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和七十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和七十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和七十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和七十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和八十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和八十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和八十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和八十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和八十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和八十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和八十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和八十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和八十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和八十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和九十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和九十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和九十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和九十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和九十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和九十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和九十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和九十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和九十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和九十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百二十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百二十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百二十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百二十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百二十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百二十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百二十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百二十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百二十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百二十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百三十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百三十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百三十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百三十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百三十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百三十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百三十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百三十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百三十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百三十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百四十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百四十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百四十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百四十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百四十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百四十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百四十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百四十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百四十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百四十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百五十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百五十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百五十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百五十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百五十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百五十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百五十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百五十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百五十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百五十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百六十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百六十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百六十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百六十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百六十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百六十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百六十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百六十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百六十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百六十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百七十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百七十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百七十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百七十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百七十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百七十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百七十六年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百七十七年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百七十八年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百七十九年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百八十年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百八十一年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百八十二年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百八十三年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百八十四年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百八十五年	1	1	1	キネマ旬報社	山本嘉次郎	東京
昭和百八十六						

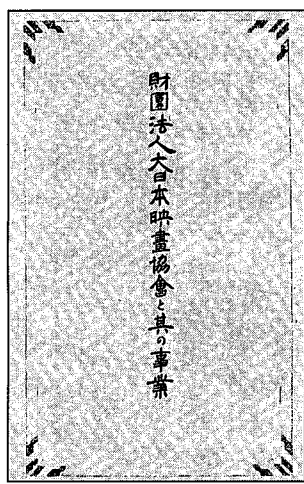
# 戦時下の映画統制の全貌を余すところなく伝える雑誌『日本映画』

牧野 守

十九世紀末に登場した映画（活動写真）が、二十世紀の一〇〇年の歴史のなかで、大衆娯楽の寵児として君臨するまでに成長した。

それはまた当時の数少ない映像メディアとしての役割を果たすことになった。この間には幾度かの黄金時代を迎えることになったが、特に日中戦争から太平洋戦争にかけての戦時下に於いて、映画の機能は単なる娯楽として止まることなく他の媒体から飛躍的に重視されることになった。国家の統制が強化され、国民映画、国策映画が要望されたが、それは製作体制ばかりでなく受容する観客にまで及んだ。こうして一九三九（昭和十四）年に施行された映画法は、芸術、文化、娯楽面での唯一の文化立法として、これまでの映画検閲制度を抜本的に変革する意図にもとづいて効力を発揮することになった。内務省の意向にもとづいて結成された映画界を一丸とした組織である大日本映画協会の発行した雑誌『日本映画』はこういう時代背景のもとで、内務省の映画統制の地均しする任務を果たすのに最もふさわしいパブリシティ媒体となった。一九三六（昭和十一年）年に創刊されるとともに、映画法制定のための意図的なキャンペーンを推進し、映画法が実施されるや、その立案の徹底化に効力を発揮した。しかも紙面上では取り締まり当局の官僚臭を払拭することを意図し、菊池寛を中心とする文藝春秋の編集陣が、この雑誌を担当した。そこには菊池寛なりの計算もあつてのことであつた。こうして当誌は、数度にわたる映画雑誌統廃合の規制からも除外されて、終戦まで唯一生命を持ち続けることで今日、当時の我が国の映画状況の刻々と変化する実態を記録する貴重な証言となつた。勿論、そのことは娯楽分野に限らず、戦時下のメディアの広がりの中での欠かすことのない出来事の手掛りを与えてくれるのである。

財団法人大日本映画協会とその事業



（映画史研究家）



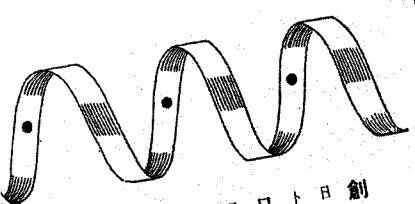
## 創刊に際して

菊池 寛

現代の... 必要がある... 新... 現代の... 必要がある... 新... 現代の... 必要がある... 新...



## 日本映画



- 創刊に際して
  - 日本映画の主要問題
  - トーキーと俳優の興亡史
  - 日本映画発展のために
  - 日本映画年代表
  - 日本のトーキー音楽
  - 大日本映画協会の成立に就いて
- 一流監督トーキーを語る座談會
- 日本全国の映画館がいっしょあるか
- 検閲室の闇に眩く
- 一本の映画製作費はどの位か、るか
- 製造法
- 田島太郎 (文)
- 富村治雄 (文)
- 北野一郎 (文)
- 川夢聲 (文)
- 九紫 (文)
- 菊池寛 (文)
- 板垣藤 (文)
- 中村武羅夫 (文)
- 上野保名 (文)
- 鹽入勉 (文)
- 島津保次郎 (文)
- 村田實 (文)
- 牛原康彦 (文)
- 内田吐夢 (文)
- 五所平之助 (文)

# 戦争の一部となり、定義し、その記

## 本書を推薦します

### 戦時下における映画の役割

岩本憲児

大正期から昭和初期にかけて隆盛を迎えた数多の映画雑誌。それらの映画雑誌は日中戦争から太平洋戦争に入る直前（いわゆる大東亜戦争直前）、昭和16年から、「日本映画」「映画旬報」ほか、計9誌に削減・統合され、大きな制約を受けることになった。新聞・放送・出版・通信などのメディアが、国家から厳しく監視され、統制され、再編成されていった時代である。

『日本映画』は、その少し前の昭和11年、つまり日本が国際的に孤立化してドイツへ急接近する年に創刊された。一方、昭和16年創刊の『映画旬報』は前身の『キネマ旬報』を引き継ぐ、大東亜戦争期の代表的映画雑誌でもあり、昭和18年末100号目で終刊を迎えた。末期に近づくほど、これが映画雑誌？と首をかしげさせるほど表紙にも記事にも戦時色が濃くなっていき、紙質や印刷が悪化し、掲載写真も不鮮明化するのとは痛々しい。しかし、内容的にはささる興味深いものがあり、特集記事の数々は戦時下の国策やメディア統制を反映しつつ、その対象は中国・満洲・朝鮮・台湾ほか、東南アジア諸国にまでおよんでいて、貴重な資料を残している。国家プロパガンダの役割を重く担われた映画と映画ジャーナリズム。この時代ほど日本映画が「日本とアジア」を強く意識した時代はないだろう。

この時期の『日本映画』や『映画旬報』を欠号なく入手することはたいへん困難であり、このたび牧野守氏のコレクションをベースに復刻版が出されることの意義はきわめて大きい。

（早稲田大学教授）

### 「日本映画帝国」の光芒

川村 湊

かつて日本は「映画の帝国」だった。松竹や日活といった映画会社は、京都や大船や蒲田に撮影所を持ち、多くの系列の映画館を持つと同時に、植民地としての台湾や朝鮮や「満洲国」へ映画を輸出した。「京城」や「台北」や「新京」の映画館で、大河内伝次郎や榎本健一や原節子や田中絹代が、スクリーン上に登場し、喝采を浴びたり、紅涙を絞らせたりしていたのである。

朝鮮には朝鮮映画協会が作られ、「満洲国」には満洲映画協会が設立された。まさに日本映画帝国は、その植民地を海外に持つことになったのだ。昭和十年代の日本映画の隆盛は、「日本映画」という雑誌を見ることで一目瞭然だ。最初の発行元が文藝春秋社であったこともあつてか、当代の知名な文学者、文化人がこぞつて日本映画について情熱を込めて語っている。菊池寛、村山知義、林房雄、丹羽文雄、北川冬彦、長谷川如是閑……。

振り返ってみると、現在、日本の映画雑誌に宣伝や単なる紹介ではない、日本映画についての文章を、必ずしも専門家ではない文化人たちが、こんなに熱心に書くだろうか。あるいは、そんなプロパガンダやコマーシャルではない、映画文化についてのトータルな雑誌があるのだろうか。「満洲国」では「満洲映画」が出され、日本語版と「満洲語版」の両方の言語で刊行された。そんな映画雑誌が、今、あるいはこれからもありうるだろうか。「日本映画」から「満洲映画」に至る「日本映画帝国」の歴史の掘り起こしが、まず「日本映画」の復刻から始められるのである。

（文芸評論家・法政大学教授）



# 憶の再構築を媒介

## 本書を推薦します

### 「なし崩しの転向」への誘導

ピーターB.ハーイ

我々、戦時中の日本映画の研究者は、しばしば共通の罪悪感に襲われる。コピー機から当時の文献をはずす度に、それら貴重な古い資料の一部が、破片となって飛散するのだ。

今回の「日本映画」および「映画旬報」の復刻版の発行は、当時の雑誌を消滅の危機から救出し、将来の世代に残すことを可能にしてくれた。

次代の研究者に私が提案したいのは、ほぼ毎号掲載された座談会の徹底的な分析である。そこには、統制官僚のトップ達に対する、監督、脚本家、映画会社重役などの悲惨な対決を目の当たりにすることができる。トップ官僚達は、明確な目的意識に裏打ちされた情報と議論の技を身につけており、映画人たちは、官僚の巧妙なレトリックの罠に陥って身動きが取れなくなってしまう。これらの座談会は、ある意味で、良心的かつ進歩的な芸術家や知識人たちが、いかにして「なし崩しの転向」へと誘導されていたかを、まざまざと観察することができる。実際の歴史的ドラマの脚本である。これらのテクストに、言語的、修辭的、文学的等さまざまな分析を加えることによって、全体主義に直面した時代の、心理的内面的環境の具体像をより鮮明に浮かび上がらせることができるだろう。

このテーマは可能性の一つに過ぎない。「日本映画」および「映画旬報」の復刻版の発行は、数多の新しい研究課題をもたらす、戦時下という時代の解明に大きな役割を果たすに違いない。

(名古屋大学大学院国際言語研究科教授・著)「帝国の銀幕」

### きわめてユニークな映画雑誌

四方田犬彦



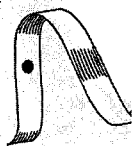
「日本映画」は、モダンな松竹が蒲田から大船に移り、ナチスドイツの監督

督が日本で合作映画を撮っていた一九三六年に創刊された。創刊号には、日本映画のため「官民合体」で「国民的緊張をもって愉快に編集」と記されている。

日本の社会が急速に国家主義・軍国主義に突入し、映画法による統制が実現されてゆくなかで、この雑誌はシナリオとは何か、映画批評とは何か、という問題を真摯に問い続けた。村山知義が熱弁を振るい、岩崎昶が文化映画を論じ、さらに溝口健二が自作『元禄忠臣蔵』をめぐって思いのたけを語った。どれもが日本映画をめぐって強い情熱を共有していたのである。

日本映画史のなかできわめてユニークな位置を占めるこの雑誌の全貌を浮き彫りにするとう、今回の復刻の意義は、当時の映画ジャーナリズムを研究するさいに貴重な資料が提供されるということにとどまらない。日本映画をめぐるマトモな映画雑誌が消滅して久しい、今日の日本の知的状況の貧しさを、皮肉なことにファシズム期の刊行物が逆に証し立ててしまおうという事実を、われわれは心して認識しなければならぬのである。

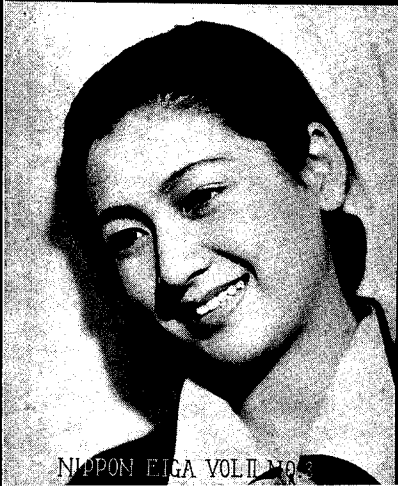
(明治学院大学教授 映画史・比較文化)



一本の映画  
夢  
子供に  
供に  
罪  
に  
漫  
野  
ナ

辰野ナ

## 日本映画



NIPPON EIGA VOL. II NO. 3

## 日本映画

# 画映



NOV 1937



[監修] 牧野 守 映画史研究家 ●全51巻揃定価1,029,000円(本体980,000円) ISBN4-8433-0586-3 C3304 A5・B5判上製

## 配本内容

### 日本映画 全31巻 (第1回配本～第3回配本)

- 第1回配本・全10巻 A5判上製/カバー  
揃定価179,550円(本体171,000円) ISBN4-8433-0589-8 C3304
  - 1◆昭和11年4月号～7月号 定価15,750円(本体15,000円) ISBN4-8433-0590-1
  - 2◆昭和11年8月号～11月号 定価15,750円(本体15,000円) ISBN4-8433-0591-X
  - 3◆昭和11年12月～同12年3月号 定価15,750円(本体15,000円) ISBN4-8433-0592-8
  - 4◆昭和12年4月号～6月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0593-6
  - 5◆昭和12年7月号～9月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0594-4
  - 6◆昭和12年10月号～12月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0595-2
  - 7◆昭和13年1月号～3月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0596-0
  - 8◆昭和13年4月号～6月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0597-9
  - 9◆昭和13年7月号～9月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0598-7
  - 10◆昭和13年10月号～12月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0599-5
- 第2回配本・全10巻 A5判上製/カバー  
揃定価185,000円(本体185,000円) ISBN4-8433-0600-2 C3304
  - 11◆昭和14年1月号～3月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0601-0
  - 12◆昭和14年4月号～6月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0602-9
  - 13◆昭和14年7月号～9月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0603-7
  - 14◆昭和14年10月号～11月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0604-5
  - 15◆昭和14年12月号～同15年2月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0605-3
  - 16◆昭和15年3月号～5月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0606-1
  - 17◆昭和15年6月号～8月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0607-X
  - 18◆昭和15年9月号～11月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0608-8
  - 19◆昭和15年12月号～同16年2月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0609-6
  - 20◆昭和16年3月号～5月号 定価24,150円(本体23,000円) ISBN4-8433-0610-X
- 第3回配本・全11巻 A5判上製/カバー  
揃定価204,000円(本体204,000円) ISBN4-8433-0611-8 C3304
  - 21◆昭和16年6月号～8月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0612-6
  - 22◆昭和16年9月号～11月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0613-4
  - 23◆昭和16年12月号～同17年2月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0614-2
  - 24◆昭和17年3月号～5月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0615-0
  - 25◆昭和17年6月号～8月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0616-9
  - 26◆昭和17年9月号～11月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0617-7
  - 27◆昭和17年12月号～同18年2月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0618-5
  - 28◆昭和18年3月号～5月号 定価18,900円(本体18,000円) ISBN4-8433-0619-3
  - 29◆昭和18年6月号～9月号 定価21,000円(本体20,000円) ISBN4-8433-0620-7
  - 30◆昭和18年10月号～同19年3月号 定価21,000円(本体20,000円) ISBN4-8433-0621-5
  - 31◆昭和19年4月号～同20年改新号(2月1日・15日合併号)  
定価21,000円(本体20,000円) ISBN4-8433-0622-3

### 映画旬報 全20巻 (第4回配本～第5回配本)

- 第4回配本・全10巻 ISBN4-8433-0623-1 C3304 B5判上製/カバー  
揃定価220,500円(揃本体210,000円/各本体21,000円)
  - 32◆昭和16年1月1日号～2月11日号 ISBN4-8433-0624-X
  - 33◆昭和16年2月21日号～春季特別号 ISBN4-8433-0625-8
  - 34◆昭和16年4月11日号～5月21日号 ISBN4-8433-0626-6
  - 35◆昭和16年6月1日号～夏季特別号 ISBN4-8433-0627-4
  - 36◆昭和16年7月11日号～8月21日号 ISBN4-8433-0628-2
  - 37◆昭和16年9月1日号～秋季特別号 ISBN4-8433-0629-0
  - 38◆昭和16年10月11日号～11月21日号 ISBN4-8433-0630-4
  - 39◆昭和16年12月1日号～同17年2月1日号 ISBN4-8433-0631-2
  - 40◆昭和17年2月11日号～4月1日号 ISBN4-8433-0632-0
  - 41◆昭和17年4月11日号～6月11日号 ISBN4-8433-1035-2
- 第5回配本・全10巻 ISBN4-8433-0633-9 C3304 B5判上製/カバー  
揃定価220,500円(揃本体210,000円/各本体21,000円)
  - 42◆昭和17年6月21日号～7月21日号 ISBN4-8433-0634-7
  - 43◆昭和17年8月1日号～9月1日号 ISBN4-8433-0635-5
  - 44◆昭和17年9月11日号～10月21日号 ISBN4-8433-0636-3
  - 45◆昭和17年11月1日号～12月1日号 ISBN4-8433-0637-1
  - 46◆昭和17年12月11日号～同18年2月1日号 ISBN4-8433-0638-X
  - 47◆昭和18年2月11日号～4月1日号 ISBN4-8433-0639-8
  - 48◆昭和18年4月11日号～5月21日号 ISBN4-8433-0640-1
  - 49◆昭和18年6月1日号～7月21日号 ISBN4-8433-0641-X
  - 50◆昭和18年8月1日号～10月1日号 ISBN4-8433-0642-8
  - 51◆昭和18年10月11日号～11月21日号(終刊特別号) ISBN4-8433-0643-6



●特におすすめしたい方 映画史、メディア研究、歴史学、思想史、社会史、政治史、近代史、植民地研究、異文化交流、文化史、美術史、写真史、コミュニケーション論などの研究者・研究機関。大学図書館。映像・メディア関係専門学校。地方自治体の映像・メディア関連センター。海外の日本学関連研究施設。



〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6  
TEL.03(5296)0491 FAX.03(5296)0493  
http://www.yumani.co.jp/e-mail eigyou@yumani.co.jp

ご注文書	ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493 年 月 日		取扱店	※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。	
	「日本映画」 「映画旬報」	全51巻 ・第1回配本(全10巻)・第4回配本(全10巻) ・第2回配本(全10巻)・第5回配本(全10巻) ・第3回配本(全11巻)		セット	
お名前					TEL ( )
ご住所					

